

---

# 氷結鏡界のエデン 目指すはハッピーエンド

咲亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷結鏡界のエデン　目指すはハッピーエンド

### 【Zコード】

Z7273Y

### 【作者名】

咲畠

### 【あらすじ】

これは主人公がパートナーのコリー・ミストルティンと氷結鏡界のエデンの世界に転生し、イレギュラーを倒すために原作介入する話です。

主人公とパートナー最強系でいくのでそれが苦手な方はご遠慮下さい  
文才皆無で読みにくかったり、性格や喋り方がかわってるかもなので  
それが嫌な方もご遠慮下さい。  
なるべく原作をしらなくてもわかるようこじつけと思つてるので  
気軽に読んでくれると嬉しいです。

## 1話 プロローグ（前書き）

はじめまして咲亞です。

最近氷結鏡界のエーテンを友達に借りて読んでたらほまつてしまい、  
その日に全巻買いに行きました。

読み終わるとなぜか咲亞の妄想が止まらなくなり、その妄想が  
この物語です。

## 1話 プロローグ

目が覚めると俺は全てが真っ白なところにいた。

「気がついたかの。」

後ろから老人の声が聞こえてきた。俺は後ろに振り返ってみるとやはり老人が立っていた。

なんで俺はこんなところにいるのだろう。俺は確か……「そうじや、お主は死んだ。」

そう、俺は事故に遭って死んだはず……えつ？ 今俺の心読まれた？！

「わしは神だから、それくらい簡単じゃ。それよりもお主は転生してもいい。それと転生する時にお主の願いを一つ叶えてやるんだ。」

えつ？ 神？？ 転生？？ なにそれ？？

「まずわしはやつを言つたとおつ神じや、名前はジテン。そして転生というのは、お主がいた世界とは別の世界に記憶を持つたまま生まれ変わることじや。別の世界とは例えば、お主が女として生きていく世界や、アニメなどの世界などがあるのじや。」

ふむふむ、すこしわかつたぞ。それで俺はなんで転生するんだ？

「お主にはその世界に行ってイレギュラーを倒して欲しいのじや。わし等神は世界に直接介入することができないから、だからお主を呼んだというわけじや。ちなみにお主に行って欲しい世界は氷結鏡界のヒーテンとこう世界じや。」

「イレギュラー？？ えつ？氷結鏡界のエデンって俺の好きな小説じゃん。

「イレギュラーといつのは、本来ならばその世界に居ない者や起らぬいはずの事をそう呼ぶのじゃ。そのイレギュラーを放つておくと世界は消滅する。今回お主に行つてもうつ世界のイレギュラーは世界を破滅させようとしている人のことじや。」

なるほど、だから俺は転生してそのイレギュラーを倒さなければいけない。

そういうことか

あと、イレギュラー倒したら俺は役目がなくなつてその世界から消えたりする？？

「お主は氷結鏡界のエデンの世界で普通に第一の人生を送れる。そのついででイレギュラーを倒してくれたらいいのじゃ。それに今から行く世界はお主の世界、別に原作通りにしなくてもいいのじゃぞ？その世界はお主が知つてゐる世界とはとても似てゐるが違う世界だからの。」

第一の人生か・・氷結鏡界のエデンの世界に行くんだからやつぱり力はいるよなあ・・・

力ないとイレギュラーも倒せないしね。

まずはパートナーが欲しいかな。だつてもしあの世界に行つて一人だつたら寂しいしね。

「どんなパートナーがいいのじゃ？アニメのキャラとかでも可能じやぞ。もちろんお主がいた世界の住民も相手がOKすれば可能じや。

なら、ユリ＝ミストルティンをパートナーにお願い  
「ユリ＝ミストルティンは主人公の世界にあるアニメのキャラで  
す。」

あれ、今なにかきこえたような・・・

「わかった。願いはあと6つ叶えるぞ。」

2つ目はシェルティスより強い魔笛と世界で1番強い沁力を持つて  
る人の100倍の沁力が欲しい。

3つ目は魔笛と沁力を制御し、術式を作つたり自由に使える力

4つ目は身体能力MAX

5つ目は戦いの才能

6つ目は技術の才能

7つ目はパートナーのユリにも能力を与えること

「ふむ、これは面白そうじゃな。しかし、4つ目の身体能力MAX  
というのは無理じゃ。

なぜならデフォルトで元からMAXになつとるから。あとユリに  
能力を与えると言つてもお主ほどは無理じゃぞ。それでもいいかの  
？」

「7つ目はそれでいいよ

4つ目の分は必要になつたときに決める。じゃだめかな？

「大丈夫じゃ。よしではさつそく行つてもらうが。」

ジテンがそう言つと足元に黒い穴が出来た

○  
L

1話 プロローグ（後書き）

2話 こんな田舎ご（繪書き）

2話題でもありました。

## 2話 こんな出会い

気が付くと田の前は綺麗な青色だった。周りを見渡してみると隣に3才位の女の子がいた。

パートナーのコリだと思ひ。一応確認のために聞いてみた

「コリ??」

「はい、あなたの知ってるコリです。」

やつぱりコリだった。しかしコリが3才位になつてゐるといふことは、

・・俺も・・・  
と思い自分の体を見てみる。やはり俺も3才くらいになつていた。  
あつそりいえば名前変えないとなあ・・・どんなのがいいかな・・・  
・よしこれにしてみつ

「コリ、俺の名前は今からアリアだ。これからよひへべ。」

「ヨウジヤムヒヘベお願いします。それと言葉遣いを変えたほうがいいですよ?」

確かに3才くらいで、へだとかはおかしいよね

「うそ、わかつたよ。これから髪をつけね。」

不意に  
ぐう

とお腹が鳴つてしまつた

「俺達が、親居ないし、家もお金もなこんだけやがりつみつ・・・・・

「「へーん。 もうですね…」

俺とココセшибいまだらりつか  
べのべりこ絶つただらりつか

後ろの方から声が聞こえた。

「アリの一人、もつこんな時間よ、早くお家に帰りなやー。」

振り返ると金色の長髪を頭の高に位置でまとめた女性がいた。

早くおひがひ帰りなやこつて言われても帰る家ないんだよね・・・

「あれ、もしかして自分のお家の場所わからなにのかな?」

「こえ・・・やひじやないんですけど・・・ね、アリア?」

「う、うさ。」

「どうしたの? よければ話してくれないかな? ?

『ココ、 どうしよう?』

俺は念話を使ひてココに聞いてみた

『 うーーは正直に書つたまつがいこと語つよ。 そのままだと私たち餓死しちやうよ。』

死しちやうよ。』

ユリはいきなりの念話に驚いた様子なく、普通に念話で返してきた。

「実は俺達帰る家ないんです。」

すると、女人人は少し考えすぐに  
「なら私の家に来ない？」

「いいんですか？」

「うん、いいよ。それにあなたたちを放つておけないからね。」

そのあと俺たちはその女人の家に行つた

女人の名前はキリエ。そう、あの料理長でした。

そして俺たちはキリエさんの家で住むことになりました。

4年後

俺は今家から少し離れたところにある公園でユリと修業をしている。  
ユリは蒼色の沁力を溜めて放出してきた。

「いくよ、貴け、蒼空一掃！」

蒼い光がこっちに向かつてくる

この技は俺とユリで考えて作った沁力の結界系・降臨系・領域系・  
礼讃系・洗礼系のどれとも違う系統で、魔法系と呼んでいる。  
なぜ魔法系と言うかは、この魔法系の元になつたのが魔法だから。  
ユリは魔法も使えるんだけど、それは今は関係ないからいいかな

俺はコリの蒼空一掃を相殺することにした

「紅空一掃！」

紅空一掃は蒼空一掃とぶつかり公園の地面にヒビが入る。そして相殺されると、公園の地面は抉れ相殺された衝撃で周りの電灯は割る。

「よし、今日はこれくらいで終るよ。」

「やうだね、このあとどうする？」

「コリが言つてコリは結界を解除する

この結界を使つと中でビルや公園を破壊しても結界を解除すると何もなかつたように元通りになる。でも人や生き物は元通りにはならない。そしてこの結界は使用者の選んだ人しか入ることはできない。結界の中は外と同じように時間が進む。例えば結界の中で1時間経つと結界の外でも1時間経つ。

「今日はこれからのことについて考えようと思つてゐる。」

「わかつた、なら帰ろつか。」

コリはやつ言い、アリアに近づきアリアと手を繋ぎ歩き出す。

家に着くとキリヒさんのが聞こえてくる

「おかえりなわー。あら、いつも仲いいわね。」

「「ただいま。」」

「私」これから買出しに行つてくるからお留守番よろしくね？」

「うん、わかった。」

俺がそう言つとキリエさんはものすごい速さで買出しに行つてしまつた。

アリアとユリは自分たちの部屋に入り座る

「俺たちがこの世界に来て4年、この間に調べた結果原作まであと2年というのは大丈夫だよね？そして俺たちはまだ幽幻種と戦つたことも見たこともない。2年後に戦うことは決まつて、その時に幽幻種に苦戦するわけにはいかない。だから原作までの2年のうちに幽幻種と戦おうと思つてる。けれど幽幻種は居住区にはまずこない、そうなると幽幻種が出るところにいかないといけない。それをいつするかなんだけどいつがいい？俺はなるべく早く戦つて強さを知つておきたい。」

アリアが言つとユリがすぐ

「原作まであと2年というのは大丈夫だよ。それと幽幻種は私もアリアに賛成かな。なるべく早く戦つておいて損はないと思う。だから近いうちに生態生育野（ヒオートープ）に行つて幽幻種を探しながら修業するつていうのはどうかな？私の転移魔法使えば生態生育野（ヒオートープ）なんて一瞬だし

ね。」

ユリは神、ジテンに魔法を使えるように頼んだらしい。

元々ユリは魔法があるアニメの世界で最強の魔法使いだつた。

なのでそのコリからすれば転移魔法など大したことはないらしい。

「じゃあ明日から修業は生態生育野ヒオトープでしよう。そこなり結界もいら  
ないと思つ。」

その後アリアとコリは雑談をしていた。

一週間後、生態生育野ヒオトープでアリアとコリは幽幻種を探していた。

「探し出して一週間かあ…なかなか見つからないね。」

「幽幻種がそう簡単に見つかつたら今頃浮遊大陸は滅びてるんじゃ  
ない？」  
オービヒ・クレア

とアリアは笑いながら言つ。

「そろそろ、休憩しない？」

もう2時間歩きっぱなしだ、俺も少し疲れた。

「すこし休憩して、今度は北の方を探してみよ。」

二人で休憩してると目の前の草むらがカサツカサツとなつたので  
俺は剣を沁力で具現化させ、コリに言つ

「コリ！なにかいる！」

するとコリも剣を沁力で具現化させ構える

そして草むらから黒紫色の狼っぽいものが飛び出きた  
その狼は濃い紫色の霧を全身にまとつてゐ  
幽幻種だ

これがアリアとゴリのはじめての幽幻種との出会いだつた

幽幻種はアリアにむかって爪を振るう。それをアリアは具現化した剣で防ぎ幽幻種を蹴り飛ばす。幽玄種はアリア達から数メートル離れたところに着地した。着地した幽幻種は襲つてこず、その場で立ち止まつている。すると幽幻種は

森に呪詛を思わせる奇妙な音色が響きわたつた。

幽幻種のまどろき紫色の霧が耀きを放つ  
紫色になつていき、腐敗していく。

「これが魔笛？！ヨリ気を付けて！」

「うん、わかつたよ。これが…魔笛なんだね、アリアー遠距離から攻撃するからアリアも一緒にお願ひ！」

確かにこれは近距離は危険だ。俺は幽幻種から距離をとる

「ヨリ！ タイニング合わせて！」

俺は紅空一掃を撃つために沁力を溜める

ユリは俺より少し先に沁力を溜め始めた。  
そして沁力が溜め終わり、ユリに言つ

「準備完了!」  
「いくよ、ユリ!」

「紅(蒼)空一掃!」  
「

紅色と蒼色の光が幽幻種に当たる  
幽幻種は周りの侵食されて腐敗している地面や樹を巻き込んで吹き  
飛んだ。幽幻種の中にある結晶が  
パリーンとなつて砕け散ると、幽幻種は蒸発するように煙となつて  
霧散する。

「ふう……疲れた……」

「そうだね、疲れちゃつた。」

「思ったより幽幻種は危険だね、それと一掃のおかげで腐敗してい  
たものも消し飛んだりもとに戻つてるね。あれは沁力の塊みたいな  
ものだから浄化もできるのかもしねり!」

「うん、浄化できるならすぐ便利かもしねり!」  
「<sup>ソフィア</sup>天結宮の人がくるかもしねりよ。」

「ユリ、転移おねがい。」

「転移、開始!」

ユリがそう言つと森には誰もいなくなつた。



## 2話 こんな出会い（後書き）

次は設定を紹介しようと思つています

3話・・・じゃなくて設定です

主人公

名前・アリア・ミルメスト

性別・男

容姿・黒髪でストレート、長さは腰より少し長い、瞳は紅く、  
どこからみても女の子にしか見えないが、性別は男  
そういうの女の子より可愛い

能力

身体能力は世界最強♪♪

魔笛・シェルティスの数倍の強さ、普通ならありえない沁力と魔笛  
が共存している。

なぜかアリアはエルベルト共鳴が起きない。なのでコミィや  
ユリと触れることができる

沁力・世界で1番強い人の100倍のはずが1000倍ある（多分  
世界で1番の人は

サラだと思うのでそのサラの1000倍）

戦いの才能・戦いに関することなら大抵のことができるようになる  
才能

技術の才能・技術に関することなら大抵のことができるようになる

才能

沁力の術式の魔法系をユリと創作  
魔法系とは現存している系態とは違い  
その名のとおり魔法みたいな系態

名前：ユリ・ミストルティン

性別：女

容姿：金髪のストレートで腰よりすこし上位まである。瞳は蒼色  
アリアより少し背が小さい。

能力

身体能力ほぼMAX

沁力：世界で1番強い沁力の人の2000倍、つまりアリアの倍ある

戦いの才能：アリアとおなじ

技術の才能：アリアと同じ

魔力：リリなのは違つ世界の魔法の世界で世界最強だった

魔法：リリなのは違つ世界の魔法の世界で世界最強だった

沁力の術式魔法系が使える一人のうち一人  
魔法系はアリアと創作

用語の解説 Wikipediaから持つてきました

### 沁力

人が生まれつき持つている力。魔笛と反発し、浄化することができる。また、この力によって『浮遊大陸』は浮かんでいふことができる。

用途によって、結界系・降臨系・領域系・礼讚系・洗礼系がある。アリアとユリには魔法系もある。

### 魔笛

本来、穢歌の庭や幽幻種が持つている術式。濃紫色をしている。様々な作用があり、単に有害だけでなく、発狂（精神操作）する作用もある。

### 幽幻種

体内に魔笛を保有した、穢歌の庭に住む魔物。物理的実体は霧のような体の中にある核晶のみ。これを壊すことで幽幻種を倒すことができるが、非常に凶暴。

また、人に対して幻影を見せたり、幽幻種自身が増殖したり、人ではなく幽幻種に対して寄生する個体も存在する。

### エルベルト共鳴

沁力と魔笛が互いに反発、共鳴しあう現象。沁力と魔笛、両方の力が圧倒的に強くなれば起こらない。

物理現象をも捺じ曲げ、電光のような火花が散る

### 天結宮ソフィア

浮遊大陸オービエ・クレアの中心に聳え立つ塔で、最上階は291階。

氷結鏡界を支える中心であり、そのための巫女や護士を養成する護法院。

階級順に護士候補生 正護士 錬護士 千年獅と、巫女見習い 巫女の隊員約1200人と、備品の管理や彼らを補佐する職員およそ1万人で組織されている。

### 巫女

オービエ・クレアを守る氷結鏡界を張る巫女のこと。皇姫サラを筆頭に序列1位から5位までの計6人のことを指す。基本的に皇姫サラを除く5人のうち2人が結界の巡回を、残る3人と皇姫が結界を支えている。

### 巫女見習い

名前の通り、巫女の見習いのこと。一般人の中から選ばれる。天結宮の正式な隊員の証であり、巫女に続く階級である階級。

結界の巫女につく専属護衛。鍊護士の中から巫女の信頼が最も厚い者が選ばれる。皇姫の護衛は主天と呼ばれる。

### 鍊護士

天結宮の護士の中でも精銳が集まる階級。千年獅とほぼ同等の実力を有す。3年前、シェルティイスがレオンと共に上り詰めた階級である。

### 正護士

天結宮の正式な護士で、巫女見習いと同じ階級。数年前まで正護士に選ばれるための制度は実績と実力のみが物を言うものであつたが、制度が変更され、緊急時に部隊で協力できる護士が選ばれるようになった。

### 護士候補生

正護士になる前の階級。正式な天結宮の隊員でもない一番位の低い階級であり、一般人の中から立候補で選ばれる。

### オービエ・クレア

地上から上空1万メートルに位置する浮遊大陸にして、この世界の名称。巨大な大陸と、無数の浮遊島ラグーンによって形成される。すべては1000年前から巫女たちが唱える結界系沁力術式『氷結鏡界』によつて支えられ、人はこの中でしか生活することができない。

浮遊大陸自体は以前から存在したが、1000年前に氷結鏡界が張られる前は盛んに幽幻種が侵攻し、人々を襲つていた。

また、单一民族ではなく、様々な民族が混在する多民族地域である。

いくつかの区分けされており、『天結宮』を中心向外側へ向かつて、  
『居住区』『自然区』『生態生育野』の3つ地区がある。  
沁力が発達する中で、航空機やスーパー・コンピューターなど、科学  
技術も発展している。

わかりにくいかもしれませんがこれが限界です><

3話・・・じゃなくて設定です（後書き）

アニメ化していないので場面を想像するのがきついです・・

用語はほとんどがwikiからもつてきています、咲姫はほんのすこ  
しだけ手を加えました。

4話 原作介入開始！！（前書き）

やつと原作1巻の内容が始まりました

## 4話 原作介入開始！！

アリアとユリが幽幻種と初めて出会い、戦つてから 2年後

この2年は今までどおり修業して、たまに幽幻種と戦うために**生体**  
**トープ**生育野に行つたりしていた。それとこの2年の間に技術の才能を使つてあるものを2つ作つた。

そのある物とは、原作の主人公、シェルティス・マグナ・イールが持つている。今は違う人が持つている、機械水晶をすこし改造したものである。イリスとはシェルティスが持つている機械水晶の個体名である。

俺たちは機械水晶を2つ作り、俺とユリで1つずつ持つことにした。俺の機械水晶の名前はティファニア、通称ティファと名付けた。ユリの機械水晶の名前はレインとユリが名付けた。

そしてアリアとユリが幽幻種と初めて出会い、戦つてしばらくしたあと原作の主人公のシェルティス・マグナ・イールが第一居住区にやつてきた。

シェルティスはキリエさんが當んでいるカフェテラス『二羽の白鳥』(アルビレオ)で働き出した。キリエさんは俺たちをシェルティスやシェルティスと仲の良いエリエとユトに紹介しようとしたが、俺たちは天結宮に入るまで知り合いたくなかったので、キリエさんは俺たちのことを内緒にしてもらっていた。なので2年たった今もシェルティス達は俺たちの名前すら知らないし、いることも知らな

いと思づ。

話は現在に戻り、今日は星礼祭が始まる日。つまり原作通りなら今日氷結鏡界が破られ、数百、もしくは数千の幽幻種が襲ってくる日である。

俺とコリは今広場で星礼祭の出店を巡り歩いている。俺とコリの胸の前にある機械水晶のティファとレインが首から下がっている。そして俺の手にはいちごと生クリームがぎっしり詰まつた、食べかけのクレープがある。俺はそれを食べながら

「コリ、今日だけど大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。ね、レイン。」

レインと呼ばるとコリの首から下がっているレインは

『はい、大丈夫です。なので心配いりませんよ、アリア』

「氷結鏡界が破られるまで存分に楽しまないとね。」

せつかくの祭りなんだしね。それに、今日の事件が終わつたら俺達は天結<sup>ソフィア</sup>宮に入るつもりだから、これからあんまり遊ぶことができなくなる。

「アリア、あっちも行つてみよつよー。」

コリはそつ言い俺の手を取り走り出す。

その頃ショルティスは

「ショル兄、起きてー。お祭り始まつてゐよーー。」

「……あと一時間だけ寝かせて。昨日遅くまで店の片付けをして寝不足なんだ。」

「やーだー、早くいかないとお祭り終わつやうつー。ほり早くーー

星礼祭3日間続くから今日じやなくともいいんだけど…  
そう心の中で呟いて田を開けると悲しそうにしてこるゴトと田が合  
つてしまつた。

「ショル兄…一緒に、来てくれないの?」

「えつ…ええと…」

「ゴトと一緒にいくの嫌い?」

「こや…そんなことは…なにナビ……わかつたよ、行くよ。」

僕はそつとベットから飛び降りた。

皇姫に捧げる三日間の星礼祭は、第二居住区で行われる。

広場には星と月を描いた旗や浮遊大陸オーピヒ・クレアに吹く風を象徴とする風車と  
風鈴という儀式的な装飾。それよりやや庶民的な趣きが強いのが大

通りで、じゅらは極彩色の風船やリボン、そして通りを埋め尽くす出店で賑わうのが一般的だ。

「お、本当に始まってるんだ。開会式前なのにすげーね。」

「あー、シールディスーおーい、待ちくたびれたじゃない。」

ツナギ姿の少女、エリエは右手にクレープ、左手にわたあめを持っていた。

「…わたくし楽しんでるね。」

「楽しみながら待っていたのよ、あー、このわたあめコトにあげる。あとお小遣いあげるから好きなもの買ってきていいよ。」

しばらくして、

「エリエ、そろそろ祝砲の時間じゃない?」

氷結鏡界の祈り。皇姫の期間が終わり、結界の統制権が巫女へと譲渡される。それとともに天結宮ツカイアから祝砲が上げられ、星礼祭が正式に始められる。しかし

「あれ、おかしいわね。」

「どうしたの?」

「えっとね、もう予定の祝砲時間すぎてるんだけど。」

祝砲がない。それはつまり氷結鏡界の統制権の譲渡が終わってない

ことを意味する。それは本来ならば有り得ないことだ。氷結鏡界の維持は浮遊大陸の存在に関わる一大儀礼。この譲渡に監視時間管理は何より厳格なはずだ。まさか何かがあつた？

「……ユミィ」

シェルティスは巫女である少女の名を眩き塔を見つめる。

「そろそろ始まるよ。」

アリアが言つ始まるは星礼祭のことではない。今日これから起つる事件のことだ。アリアがそつと居住区に念話が聞こえてきた。

『巡回中の巫女および千年獅の2組、お疲れ様。それに居住区の皆様、お元気？巫女のメイメールよー、突然だけどみんなにとっても大事なお知らせがあつて、こうして念話でお邪魔させてもらつてるわ』

「ユリ、準備いい？始まるよ」

「うん、大丈夫」

『突然の報告だけど落ち着いて聞いて歌の庭<sup>イーテン</sup>を封じていた氷結鏡界が幽幻種に突破されたわ。』

すこし間があいてまた念話が聞こえてくる

『既に万を超える幽幻種が浮遊大陸を目指して上がりて来てるわ。ハツキリ言つとあと一時間も立たないうちにこの浮遊大陸は幽幻種の大群に襲われる。』

また少し間が空いて念話が聞こえてくる

『現状は理解した? そこで居住区にいる住民の皆さんにお願いよ。今から30分以内に緊急用の地下シェルターに隠れなさい。天結宮の護士たちが、そこで命を張つて防衛します。いいわねー?』

念話が中断するとアリアは呟いた。

「あー、緊張するなあ。」

「そうですね。」

たしか原作だとこのあと皇姫のサラから”あと3時間くらいならわたしも氷結鏡界を一人で支えれる”みたいなことを言つてたはずだから、3時間以内に幽幻種を殲滅しないといけないのか。個体の強さによるけど数百や数千なら3時間で終わるはず、というか原作だと終わってシェルティスが天結宮でユミイと再会している。

「第三居住区に行くよー。」

そう言つと二人は緊急用の地下シェルターに避難せず第三居住区に向かつて走り出した。

悲鳴や怒号が大通りに満ちていた。出店も何もかもそのままで逃げ出す者、はぐれた家族、恋人を探している者。その人ごみが避難シェルターの方向へ駆けていく。

「…最悪だ。思っていたよりもずっとひどい。」

「ね、ねえつてばシェルティス！あたしりづくすればいいのよ…？名メールつて巫女様が言つてたとおりに避難するの…？」

「一般人は従うしかないよ。」

シェルティスは昔、天結宮ソフィアで護士ソフナーをしていた。そして穢歌エテンの庭に落ちた。その1年後シェルティスは浮遊大陸オービエ・クレアに戻ってきた。その後天結宮イアから追放され居住区に逃げてきた。そこでキリエやエリエ、コト達と出会つたのだ。

キリエはシェルティスが昔護士だつたことを知つていて。だからなのだろう、キリエはシェルティスに避難するのと言つた。しかしシェルティスは自分のことを一般人と言つた。

そういうえばコトは一人で楽しんでいたはずだ。

「…とにかくコトを探さないと。」

「シェル兄ー！」

コトがシェルティスを呼ぶ声が聞こえる。シェルティスは声が聞こえた方に向かつて行く。すこししてコトを見つけた。

「コト…よかつた、ここにいたんだ。」

「ショル兄、この人たちどうしたの？」

慌てて逃げる周囲の人々をぽかんと眺める少女。星礼祭を楽しむあまり、巫女の話を聞いていなかつたのだらう。

「ううん、いいんだ。それより早く逃げるよ、おいでー。」

シェルティスはコトの手を握り早足で歩き出すとし

「…えつ？ ショル兄にげるの？」

コトは手を握つたまま動いとしなかつた。

「うん、時間がないから後で説明するよ。とにかく避難シェルターに隠れないと。」

「コト、ショル兄と一緒にい

「わかつて。一緒にシェルターにいてあげるから。」

「ううん、そりゃないの

コトは首を横に振る

「ショル兄は、守ってくれないの？」

「え？」

「ユト、シェル兄と一緒にならシェル兄に守つてもうつのがいい。」

「…僕が？」

シェルティスは足を止める

「守つてもうならユトはシェル兄がいい。シェル兄、前の公園でも守つてくれた……」

「僕が、幽幻種からだれかを守る？」

「…天結宮から追放されて何もかも失つて、もう巫女と呑うことすら許されない僕が？」

「シェルティスどしたの？」

「い、いや……なんでも……ない、よ。」

「もう、シェルティスつてば、突つ立つてないで早く行くよ！ あたしたちの避難先つてたしか第6シェルターだよね。距離あるから急がないと。」

避難？ 本当にそれでいいの？ ただ守つてもうつだけで？

胸の中でなんどもなんどもこだまする自分の声。  
もう天結宮に関わることすら許されない。かつての幼なじみの少女は今や浮遊大陸を守る巫女。かつての友人も巫女を守る千年獅。二人とも浮遊大陸で崇敬される人物だ。

かたや自分は、もはや居住区に住む一般人。

自分にできることはただ一つ。コミィが巫女として、レオンが千年獅として無事にやつていけることを居住区から祈るだけ。

……そんなこと、2年前に痛いくらい胸に刻んだはずなのに。

そのはずが、胸にこびりついて離れないもどかしさは何なんだろう。

「コミィ……」

シェルティスは人の流れに逆らつて振り返った。

ビームでも多角伸びる白壁の塔を。

### 第三居住区

居住区の中で天結宮<sup>ソフィア</sup>から最も離れたところにあり、自然区と隣接した場所だ。商業が活発な第一居住区と違い、こぢりは集合住宅がらぶ賑やかな住宅街としての色が強い。

その第三居住区には人影のただひとつも見当たらなかつた。

「通りに人影なし。家も…だれもいねーな。とりあえずおおかた避難したか。」

しんと静まり返る街路を行く数重の足音

ロングコートにジャケット、ドレス。装いこそ異なるが、だれもが純白の儀礼服を纏っている。

天結宮の護士そして巫女候補生。

大剣、重鎗といった近接武器に加え、破碎弓、投擲機、銃火器。誰もが何かしらの武闘、沁力術式において浮遊大陸有数の実力者だ。

「静かー。ねえ爛ラン、いまなら勝手に家にお邪魔してもバレないかしらー？」

「メイメル、茶でも飲んで休憩か？まだ何も終わっちゃいないぜ。」

天結宮の第一師隊。

しばらくして、メイメルに念話が来た。

「たった今、自然区と生態生育野ビオトープに散つていてる巫女一人から念話がきたわ。」

「なんて？」

「抗戦中とだけ。とにかく幽幻種の数が多すぎて……『何千体かに突破された、居住区に向かってる。』と行つたきり交信を着られたわ。もう念話に力をまわす余裕もないみたい。万の幽幻種なんてもしかしたら浮遊大陸オービエ・クレアは滅びるかもしないわ。」

シェルティスは無人となつた第一居住区にいた。

「さ、急ぐよ。遅れたらシェルターの扉閉まっちゃうんだから！」

エリエが肩で息をしながら声を張り上げる。

そんな彼女のすぐ後ろには、三輪、ヴィークルがけたましい起動音を吐き出して出発の時を待つていた。

通りに設置されている時計塔を見る。とっくに幽幻種が浮遊大陸に上がりきつた時間だ。天結宮の護士たちが居住区直前で防衛戦を張り、侵攻する幽幻種と抗戦しているはず。

……けど、本当に立ち向かえるのか？

……メイミルという巫女が言うには数千を超える幽幻種という話じやないか。

抑え切れる数じゃない。せいぜい居住区の人間が避難するまでの時間稼ぎが精一杯。いや、あるいはその時間稼ぎすらもたなくとも不思議じゃない。一駄でも脅威となる幽幻種、それが数千体以上。それも結界を破つたやつだ、通常の個体より強力なものがいると考えるべき。本当は一人でも火星が必要なはず。

「シェルティス？」

心配そうなエリエの声にも、ただ黙つて頷くだけが精一杯だった。

”シェル兄は守ってくれないの？”

……なんでだらり、頭からわきの言葉が離れてくれない。

突然、地面がひっくり返るほど衝撃が走った。

「オオオッ……と唸る地鳴り。

一瞬遅れて、何か巨大なものが崩れた音が津波のようにやって来た。

「まさかッ」

振り返った方向は、はるかに離れた第三居住区。

数十階はあろう巨大なビルが内部から黒い霧を吹き出して倒れていく。

その周囲までも続けざまに家屋が崩れていく光景。魔笛に侵食されて腐り、ドロドロに溶け落ちていく。

「まずい、もうそこま」

言いかけたエリエが凍りつく

第三居住区の邦楽から風に舞い上がる濃い紫色の霧。

「霧なんかじゃなくて……あの点一つ一つがみんな幽幻種？」

空を真っ暗に覆い尽くす幽幻種の群れ。翼を持つ個体そのものは稀であるが、あの獣は身体を霧状にする特質を持つ。そして今、風は天結宮へと吹いている。今幽幻種が風に乗れば、天結宮の地上まで一気に侵攻出来ることになる。

「シヨル兄、怖いよ。」

幽幻種の大群は第一居住区など眼中になかった。あの不気味な獣たちが侵攻するほうがくはただひとつ、<sup>ソフィア</sup>天結宮だ。

氷結鏡界を支える天結宮<sup>ソフィア</sup>。そこだけを目指して幽幻種たちは進んでいた。

「…そうだよね。」

「怖い…よね。」

きっと誰でも怖いはずだ。皇姫だつて巫女だつて、千年獅だつて怖いはずだ。本当は誰だつて逃げ出したい。

だけど、それでも

「ゴミィは…逃げないんだよね。」

巫女は逃げない。最後の最後まで天結宮<sup>ソフィア</sup>を守り続けることが使命なのだから。

レオンもそうだ。あの男が退くはずがない。守るべき巫女が天結宮<sup>ソフィア</sup>にとどまる限り、命をかけて守り続けるのが千年獅の役目なのだから。

……あの日の約束も、そつだつた。

”ゴミィが巫女になつて僕を守つてくれるつて言うなら、僕だつてゴミィを守る千年獅になる。そうすれば一緒にいられるでしょ？”

”だから泣かないで、ね？だいじょうぶ。塔の1番高いところまで、絶対ユミイのところまでいくからわ“

そんな約束に憧れていた。

……行こう。

すこし離れたところから巨大なビルが倒れながら蒼色と紅色の光が見えた。そのひかりとともに

ドゴオオオツ  
ン

巨大な地響きが聞こえてきた。しばらくすると周りのビルは跡形もなくなつてあり、その場所だけ幽幻種がいなくなつていた。

「二人とも、怖い重いさせてごめん。でも　　もう大丈夫だから。全部終わらせてくるから。」

「ちょっとー・シェルティスどこ行くのよー!?

「HリHとコトはシェルターに逃げてて。僕忘れ物取りに行つくる。」

剣も友人も思い出も、何より大切な彼女との約束を。

二年前、全てあの塔に置いてきた。

取り戻しに行こう。

「もうだよ。なにが追放だ。」

「ショルティス何勝手に歩き始めてんのよ、早くヴィーグルに乗りなつての。」

「じめん、僕のことは放つておいて一人は先に避難」

「だ、か、ら、もうじやなくて! 天結宮ソフィアに行くんでしょ? それならわざと乗りなさいっての。送つてあげるから。」

「えつ?」

「ソルから走つたつて間に合わないでしょ。ほりこむつちおいで。」

コトを後部座席にのせたエリヒの姿を見てショルティスは我が目を疑つた。

「な、何言つてるのさー上の幽幻種ソフィアがどこ向かつてるか見てみなさいよ。今の天結宮は危ないなんてもんじゃにんだつて!」

「だつてショルティス行くんでしょ。正直怖いけど、それなら付き合つわよ。」

「…ありがと。」

「よし決まり。それじゃあ出発、天結宮ソフィアまで最速で突つ込むよ。」

「……エリエ、全部終わったらゴリヤの」と紹介するよ。友達になつてあげて。」

「おおつーーそれ嬉しいかもー。」

ヴィーグルは動き出した。

「ふう……疲れた……」

「ふう……うだだね。どのくらい倒したかな？」

ゴリがそこそこ首にかかっていたレインが答える。

『およそ300体くらいです』

アリアとゴリがそう言つていると、一人の周りに幽幻種が沢山現れて、二人を囲んでいた。その数今まで倒してきた数と同じくらい……もしくはそれ以上、アリアは自分たちを囲んでいる幽幻種を見渡した。

「ゴリ、一掃しよう。本気で撃てばこのくらいでいいでもなるはずだから。」

「そうだね、これ以上一体一体倒してたら疲れて死んじゃうしね。それじゃあカウントするよ?」

ゴリはそう言つとカウントを始める

「10、9、8、7、6、」

「

カウント共に風が巻き起しる。

「3、2、1：「「紅（蒼）一掃！…」」

周りにいる幽幻種に向かつて飛び出す光、幽幻種にあたると幽幻種消滅していく。一人が一掃を撃ち終わると周りには何もなくなつていた。ビルも幽幻種もすべて。

「今の音はなんだッ！？」

爛は音がした方を振り返ると、蒼色と紅色の光が天高く伸び、その光が周りのビルを巻き込んでいる光景が目に入った。

「なつ……なんだあれは……あれは敵なのか？それとも味方か？」

光が無くなるとさつきまで明るかつたのが途端に暗くなつた。そして黒の空。幽幻種の体から噴き出す濃い紫色の霧によつて太陽光が遮られ、周囲の視界がみるみる悪化していく。

1メートル先もみとせないほどの闇色に周囲が染まり…

『各位、邪魔な霧を吹き飛ばすから眩しいわよ』

メイメールからの念話

直後頭上を照らす猛烈な輝きに爛は両目を細めた。

メイメールの大規模な沁力結界が展開  
き飛ばす。  
上空に停滞する霧をはじ

見えてきたのは何十体という数の幽幻種。大き者子猫から獅子まで、どの個体も霧状の身体から四肢が見え隠れする地上歩行型だ。

Oe / Dial U xeph  
o phe s ka on  
c le y ' Di  
s he la te  
:

魔笛、幽幻種の有する特異の力だ。  
が

「遅い！」

魔笛の紫光が放たれるより先、爛は幽幻種の懷まで飛び込んでいた。人外とも言える反射神経と筋組織を有する少女の疾走は、その初速で可視速度を凌駕する。

爛は幽幻種に拳を叩き込む。

その拳は幽幻種のまとう霧をも吹き飛ばし、その奥にある結晶へと突き刺さる。

悲鳴を上げて消滅する幽幻種

「それにしても… 狹いはあくまで天結宮つてか？」

爛は一人で数十体は削つたし、いまも目の前には数体の幽幻種。しかし厄介なのは自分たちを標的としていることだ。常に自分たちを避けるように迂回して天結宮ソフィアへ向かつて突進していく。現に、爛の知るだけで数十体がこの防衛ラインを超えてしました。

全体ではどのくらいの数が天結宮ソフィアに向かつたかもはや数得ようとう気も起きない。

それにさつきの蒼色と紅色の光も気になる。あんなものは今まで見たこともない。ただの一撃で周辺を吹き飛ばすほどの威力。

……今はそんなこと忘れておこう。今はまだ戦闘中だ。それにこれ以上通すわけにはいかない。

刹那、

「あ……つ……あ……？……ア……アアアアアアア……アアツツツツツ！」

狂気に満ちた声。

両手に構えた双剣を周囲構わず振り回し、敵味方構わず斬り付ける。その後頭部に濃い紫色のきりがベッタリとまとわりついているのがかすかに見えた。

「……精神操作かッ！」

魔笛の作用の一つで、呪いを与えた相手を恐慌状態に陥れる力だ。直接死にかかる能力でこそないが、混戦においては腐敗や猛毒以

上に危険な場合がある。特に感染者は鍛え抜かれた護士だ、錯乱状態で剣を振り回すだけで脅威となる。

「いまは浄化なんてしてゐる場合じゃない。」  
氣持ちをこじらえて部下に向き直り

「いまは浄化なんてしてゐる場合じゃない。」

田の前に薦色の神の少年がいた。

突然の乱入者に周りの退院たちが声をかける間もない。天結宮の剣士が剣の「こと」とく紙一重で躰し、少年が一瞬でその背中へ回る。そして。

とん。

後頭部を揺さぶるように殴打されその剣士は氣を失つて地に伏せた。

「混戦での精神操作ならとにかく氣絶させるのが手つ取り早い。どうでしょ？」

にこりと微笑む少年

「え？…あ、ああ」

たしかに少年のやつた方法は欄も知る方法である。だが同時に、天結宮の剣士相手に背後をとつて昏倒させる  
斐ア それがどれだけ困難を極めるかも知つている。

それを、こいつはした。こいつはだれだ？

剣の攻撃範囲を知りぬくしたように攻撃を誘導し、流麗な体さばきで剣を捌く。あれと同じことができるものが千年獅を除いて天結宮の中にどれだけいるだろ？

「おい！お前……」

ただものでないのは明らか。こいつは一体？

「じゃ、ここ任せたから。」

「あ、おい待て、てめえ逃げんな！」

少年は逃げるよつに背をひるがえす。駆ける方向に明らかに改造を施した巨大ヴィーグル。

「なにしてんのショルティス！寄り道してる場合じゃないでしょ？」

「！」

ショルティス？

その名前には聞き覚えがあった。それもじく最近。そつコノイイが言つていた。

”ショルティスは、わたしの幼なじみなの”

「まさか……、おい、お前コノイイの つ！」

まさかあいつが、穢歌の庭におちたつていつ。  
（ハゲン）

シェルティスはヴィーグルに飛び乗つた。

「ごめん、天結宮に入る前に使える武器がひとつしても欲しくて。」  
ソフィア

シェルティスという名前の少年はヴィーグルに乗り天結宮の方へと  
消えていった。  
ソフィア

あいつは… シェルティスというやつはいつたい…

今は敵に集中だ。爛は幽幻種へ向かつて飛び出す。爛は幽幻種を拳で貫きどんどん倒していく。

後ろの方から聞こえてくる狂気に満ちた声。もう聞きたくない声。しかも今度は3人もだ。

「ち、また精神操作か、それも3人も同時にかよ…」

爛は精神操作された部下に向き直り飛び出そうとした瞬間

シユツ とん、とん、とん。

とん、とこう音と共に精神操作された部下は倒れていへ。おそれく  
氣を失つたのだつた。

田の前には黒髪で腰より少し短くストレートで紅い瞳をしている  
可愛い少女が立つてゐた。

「い、いまのお前がやつたのか？お前はなにものだ？」

同時に遠くから少女の声が聞こえてくる。

「アリアーーーまつとよーーー。」

遠くから走ってきた少女は金髪で腰より少し短くストレートで蒼色の瞳をしている。この少女も可愛かった。その走ってきた少女は黒髪の少女をアリアと呼んでいた。

「そこの黒髪の少女、お前がアリアか？そしてその金髪の少女、お前のお前はなんだ？」

するとすぐ元で呼ばれていた少女は言った。

「俺は男だッ！……」

なつ、男だと……私より可愛いくの……

「私はコリ、コリ・ミストルティンです。」

金髪の少女はココと言ひしき。

「俺はアリア、アリア・ミルメスト。性別は男だ！」

やはり、アリアは男らしい……

それよりも

「お前、アリアとか言つたな。さつきのはなんだ？」

アリアは答えた。

「あれは普通に移動して後頭部を叩いただけだよ。」

「そ、そつか……って普通に移動つてなんだよつ！なんだよあれ！  
それにお前達は護士じやないよな？お前たちはなにものだ？」

アリアとコリは白い儀礼服を来ていない。それにみたところ10才  
も行つていないうらいの子だ。ただものじやない。

「俺達は  
」

アリアが答えようとした瞬間、幽幻種の声が響きわたつた。その声  
に周りを見渡してみると数十体、もしかすると百以上の幽幻種がい  
た。その数に隊員は驚き、恐怖し慌て出す。しかしさつきやつてき  
た一人は驚きはしたもの、恐怖したり慌てたりはしていなかつた。

ユリがアリアに向けてだらづ、一言言つた。

「一掃するよ！カウント！5、4、」

「

ユリは一掃するといい、カウントを始めた。この状況でするのだ。おそらく攻撃の準備だろ？

「わかった。」

アリアが一言言い、構える。構えたところにいきなり剣が現れ、その剣の先に光が集まつていく。

この光は 沁力？なぜこの少年がこれほどの沁力を……と考えていると、カウントをしてい少女も剣を握つており、その剣の先に光が集まつていく。そして少年の光は紅色に光だし、少女の光は蒼色に光り出していく。

……」の光は確かに、さつき遠くの方で蒼色と紅色の光がビルを巻き込み天高く伸びていた光と同じ色。まさか、さつきのもこの二人が？！

「2・1・0」「紅（蒼）空一掃！…」

剣の先に集まつた光が幽幻種の大群に向けて飛んでいく。その光にあたつた幽幻種は次々に消滅していった。その光は幽幻種だけではなく周りの建物も巻き込んでいく。それを見た爛と爛の隊員は驚きを隠せなかつた。

「な、なんだそれは…！」

爛は訳も分からず叫ぶ。

それもそのはず、自分たちが一体一体相手して倒していくのを百位の数の幽幻種を一撃で倒したのだ。

「これは沁力を使った魔法系の術式です。」

え？ 魔法系？ なんだそれは……沁力の系統は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の5つしかないはず……

「魔法系ってなんだ？！ 沁力の系統は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の5つのはずだ。」

爛が聞くと今度はコリが答えた。

「魔法系というのは、私とアリアが創った新たな系統です。」

創つただと？ しかもこの10にも満たない一人が……

すると空に小型の竜ほどの大きさの大型の飛行型の幽幻種が飛んでいた。

「なんだ、あの幽幻種は……」

あんな大きさでしかも飛行型？ あんなのが天結宮にいつたらやばい。

「あ、あれは、統率個体？！ コリ！ 天結宮に行くよー！」

「統率？！」

幽幻種は個々が独立した存在。小さな群れを形成した時だつと、

そこに統率役の幽幻種がいたという報告は聞いたことがない。

「今回の幽幻種の行動は天結宮の巫女と皇姫を狙うという極めて一缶した行動理念が見て取れる。氷結鏡界の譲渡する瞬間という氷結鏡界の弱点をついた結界突破から始まって、強力な個体を天結宮への侵攻に集中させるなど、強力な統率意思が背後に存在すると考えられる。そしてこれがおそらく統率個体。」

「なるほど……な。」

「アリア！天結宮行く準備出来たよこっちきて！」

ユリが言つと同時にアリアはユリに抱きつくる。

次の瞬間二人の足元に奇妙な模様が現れた。

「じゃあ、ここ任せたよ。天結宮は俺たちに任せて。」

次の瞬間、二人は光に包まれ消えた……

## 4話 原作介入開始！！（後書き）

なぜか異常にながくなってしまった。

他の作者様に比べたら短いかもしませんが、咲姫にとつてはとても長い1話になりました。

今回はシェルティスたちの出番が多くてアリアとユリはあまり出番がなかったと思います。それと今回なぜシェルティスたちの出番が多かったかというと、それは小説の文を引き抜いたりしてたからです。

本当にダメな作者でいいませんm(—)m

次で、幽幻種侵入事件をおわらせることができるばとおもつています。

できれば、アリアとユリが千年獅と巫女になるところまで行けたらいいなと思っています。

これから頑張つてオリ主の出番を増やしていけたらなと思つています。

これから原作崩壊するかもしませんが、崩壊するまではちょくちょく小説の内容を丸写しするかもしません・・・

しかしーそこにオリジキャラが入るとそれはオリジナルストーリーではないのか?と思つてしましました。これは悪いことなんでしょう?文才無い咲亜は小説を移すつちに少しづつ文才が・・・あがるといいです・・

コリ「咲亜の話は置いといて、本編始まります!」

咲亜「ちょっとまって!私の愚痴を聞いてくれないかな……」

コリ「えっ、な、泣かないでください。愚痴聞きますから」

咲亜「えとね・・・私の家自営で居酒屋してるのね、すこし前までバイトしてたんだけど、親と一緒にいるのが嫌でバイトやめたのね。そして今日時給UPするから働け!とか言つてきて、時給低いからやめたんじゃないんだけど...あんたを見たくないからやめたんだけど...って思つたんだ。それで嫌だ。つて言つたら「今家族崩壊の危機なのに働かんのか!?」みたいに言われて、そんなんで家族崩壊するなら絶対しないで崩壊させてやるつて考えていたら次は「家族が困つてる時に、手伝ってくれんなら、こつちもお前を困らせるしかないぞ?例えばPCのネット切るぞ?」とか脅してきました。それにあんたなんか家族じゃないんだけど?...って思つたの。それ

にこの父親らしきものは今まで私に酷いことしてきたので夏休みの時に家出してたくらいです。こんな父親とかいますか！？酷いと想いませんか？！その脅しのせいで…私の自由時間が…小説書く時間が…「うわああああーーん…ぐす…」

コリ「咲姫、よしよし、泣き止んで、そして筆持つて続きをね。それで、それでは本編始まります。」

愚痴を言つてる咲姫の文法が変でも許してください。本当に愚痴を言つてたらこうなりました。そしてこの愚痴は事実です。励まして欲しいです…・・・

## 5話 新たな千年獅と巫女

天結宮<sup>ソフィア</sup>の護士から双剣を借り・・・奪つたシェルティスはエリエ、コトヒヴィークルで天結宮<sup>ソフィア</sup>に向かつていた。

疾走するヴィークルの机上で鞘を路面に投げ捨てる。青く煌めく氷の刀身　　氷結鏡界の蒼氷を材質に用いた剣であり、それ自体が強力な沁力を帶びている。

「へえ、水晶みたいで綺麗。天結宮<sup>ソフィア</sup>の護士はみんなそんな武器使つているの？」

「大体はね。とにかく沁力を帶びていないと幽幻種には効かないし。」

会話しているうちに天結宮<sup>ソフィア</sup>の敷地を駆け抜ける。敷地には芝生<sup>ソフィア</sup>が敷かれしており、その芝生はどす黒く変色し腐つており、外壁と防壁は溶け落ちていた。すでに天結宮<sup>ソフィア</sup>も幽幻種の侵攻を受けたのは確実。何体の幽幻種が潜んでいるかもわからない。

「で、どこ行くの？正面ゲートから一階に入っちゃう？」

「だめ。そつちは防衛ラインが敷かれているはずだから」

一回は全体が巨大なロビーだ。天結宮<sup>ソフィア</sup>に侵入した幽幻種を迎撃つには一番効率がいい。鼠一匹許さない厳戒態勢が敷かれているはず。

「エリエ、次の分岐路を右！塔の外壁に沿つてぐるっと回り込んで！」

「あいよつと」

眼前を埋め尽くす巨大な塔を、外周をなぞるよつて機体が駆ける。

なにしろ直径だけで数百メートルを数える建造物だ。

「つて、どこまで行けばいいのよ？正面ゲートじゃないなら東と西のサブゲート？」

「ううん……あ、いま見えてきた赤い扉！そこまで行つてヴィークル止めて！」

塔の横壁に取り付けられた両開きの扉。

「パス、変更されてないといいんだけど……」

とボラの脇に取り付けられた電子画面へ、数十桁に及ぶ複雑な解除式を入力。電子錠によつて閉じられていた扉の密閉が解け、両開きの扉が左右に開いていく。

「ふうん、<sup>ヒーベータ</sup>昇降機じゃないわよね、やけに外壁の作りが頑丈そうだし

コン。横壁を叩いてエリエが反響音に耳を澄ませる。四方が壁に覆われた密閉空間。足元の床だけは淡い色合いのカーペット、残りの壁はすべて無機質な金属地だ。

「「」の機械音……「」れ、まさか射出機？」  
カタパルト

「うん、何百キロある積荷を240階のホールまで射出する機械砲台らしいよ。人用の設計じゃないけど今はそんなムチャもしなくちやいけない状況だから。」

振り返るその先で、重厚な金属扉が口を閉じていく。

もう戻れない。

240階から最上階まで、あとは上がるだけ。

アリアとコリが転移した先は天結宮<sup>ソフィア</sup>の291階、そう最上階だ。

目の前には、蒼く輝く氷の世界がどこまでも広がっていた。

天結宮<sup>ソフィア</sup>の291階は『樂園』と名付けられた最上階。

天井も横壁もない、どこまでも延々と続く無限の空間がそこにはあった。

やつ、まるで別世界だ。

遮るものがない頭上には白夜に似た光があふれ、青の輝きの下には大樹の「ごとくそびえ立つ蒼氷の氷壁」がどこまでも連なる光景。氷壁の表面はあらゆる宝石よりも鋭く美しく研ぎ澄まされ、鏡の「ごとく世界を映す。

……息が凍る。

あらゆる防寒具も意味をなさない。あらゆる生物、あらゆる物質、そして幽幻種。全て例外なく凍てつかせ、その心と時を封印する沁力術式

氷結鏡界。

「思つたより寒い…」

寒氣に耐えながら、蒼氷の連なる回廊を進んでいく。やがて氷の連峰が途切れる。同時に、周囲を駆ける氷雪混じりの強風も静まつた。

天結宮の最上階『樂園』、その中に水晶の形をした巨大な蒼氷結晶。

淡く透きとおつた結晶の中心に、ひとりの女性が閉じ込められていた。

蒼氷の奥で、彼女の待とう純白の法衣がぼんやりと浮かんで見える

全てを凍てつかせる蒼氷に皿ら身をゆだね、たつた一人で氷結鏡界を祈り続ける女性。

「サラ、俺達は現時刻を持つて、ユリは巫女となり、俺はそれを守る千年獅として活動する。」

「アリア、ユリ、これからよろしくお願ひしますね。」

なぜこうなったのかといつと、そう、それは1年くらい前のある出会いから始まった。

1年前の俺達は公園で結界を張つて修行していく、いつもどおりの一日になるはずだった。しかしその日は違つた。その日は結界の中には3人いた。そのうち一人は俺とユリ。で、結界の中に入つたもう一人というのがサラだった。サラはどうやつて結界の中に入つたのか走らないが、ほぼ最初から最後まで見ていたらしい。修行が終わるとサラが出てきて言った。

「あなたたちはとても強い沁力を持つてますね。それも私よりはるかに多い量の沁力を。見たところ天結宮の人たちではないようですが、名前を聞いてもいいでしょうか？あ、私の名前はサラといいます。」

これが最初の出会いだった。

その時はすこし話をしただけだったけれど、それからちょくちょく会うようになった。そしてそれから何ヶ月か経つた時のことだ。俺達は、数ヶ月後に氷結鏡界が破られ、幽玄種が襲つてくることをサラに伝えた。

するとサラは

「もしよろしければ、天結宮で巫女と千年獅になりませんか？」

サラは俺たちの修業を何回か見ていた。そして俺たちの力を認めてくれたのだろう、俺たちを巫女と千年獅に誘つてくれた。

そり、これは普通なら有り得ないことだ。なぜなら巫女になるには普通最初に巫女見習いとして天結宮に入らないといけない。巫女見習いになるだけでもとても名誉なこととされている。そして巫女見習いは数年を氷の中で仮死状態として祈り続けるなど、とても過酷な修業をし、巫女になるのが普通だ。しかし氷結鏡界を維持する結界巫女は皇姫サラを筆頭にして第一位から第5位までの計6人しかいない。

それに千年獅になるにはまず護士候補生にならないといけない。護士候補生は正護士になる前の階級で正式な天結宮の隊員でもない。そして護士候補生から正護士になるには、少し前とは違い現在は、「褒賞システム」と呼ばれる制度を採用しており、その制度は任務などをこなし、褒賞ポイントを一定量までためることで正護士になることができる。そして正護士でやつと天結宮の正式な護士となり、その上には鍊護士と呼ばれる階級がある。鍊護士は天結宮の中でも精銳が集まる階級で、千年獅とほぼ同じ実力を有しており、ここまでくるだけで数年はかかるはずだ。そしてそこからさらに巫女に選ばれないと千年獅にはなれない。

なのに、だ

サラは天結宮にただ勧誘するのではなく、いきなり最上位階級の階級にならいかといつてきたのだ。

俺達はこの世界に来た時から天結宮に入ることを決めていたし、いずれ巫女や千年獅になろうと思つていた。それが今叶おうとしている。

そして俺はこう答えた。

「俺たちでいいなら喜んでなるよ、でも俺たちが天結宮<sup>シカヤ</sup>に入るのは今じゃなくともいいかな? サラには今から数ヶ月後に氷結鏡界が破られ幽幻種<sup>フイア</sup>が襲ってくること教えたよね。俺達はその時に自由に動きたい。だからそれが終わってからか、その事件の終わる直前まで待つて欲しい。」

「はい、ようこんでお待ちしております。もしよなうすれば、天<sup>シ</sup>結宮<sup>カヤ</sup>に入るとき私のところに来て下されませんか?」

「うん、わかったよ。ゴリもそれでいいよね?」

「うん、それでいいよ」

とこうよつなことがあった。

「わい、これからどうよつが…」

「うーん、やっぱ

ゴリがしゃべつてこる途中に天結宮<sup>シカヤ</sup>が震えた。

「もしかして、この音ついー。」

「アリア、下の階にいる巫女のところに転移するからこち来て！」

アリアはいそいでコリに触れるくらいの距離まで近づいた。そして二人の足元には奇妙な模様が浮かび上がっている。この模様はコリの前いた世界で言つと魔法陣とよばれるものである。

「転移、開始…」

魔法陣が光り、二人は光に包まれていく。光が収まると楽園にはサラしかいなかつた。

あの子たちを頼みましたよ

サラの呴きは誰にも聞かれず楽園に響きわたつた。

時は天結宮ソフィアが震える少し前に戻る

シェルティスは241階でレオンと会いレオンから数年前までパートナーだった機械水晶イリスを受け取り、281階の大聖堂を守る巫女二人を助けるため上を目指して281階まで来た。シェルティスは途中の階の幽幻種を倒しながらここまできた。双剣を両手に持つ少年の右肩と背中には骨に到達するまで幽幻種の爪にえぐられていた。

そして、今シェルティスは思わず見上げるほどの巨大な扉の前にいた。

莊重かつ鮮やかなレリーフがほどこされた金属製の扉。その扉が青く淡い輝きに満ちていた。

「沁力で守られた扉？」

『……鍵はかかっていません。扉を開けてみてください。』

言われるままが一扉の取っ手に手をかざし。

チチ……チッ！

「つ……なつ……！」

突如、雷光を思わせる青白い火花が迸った。その衝撃に吹き飛ばそ  
うになるのをかろうじて堪える。いま、たしかに扉に手を弾かれた。

「……まさか、エルベルト共鳴……………？…………こんなとき…………！」

白く火傷した手の傷も忘れ、シェルティスは眼前の扉を睨みつけた。

エルベルト共鳴。

真逆の属性を持つ人の沁力と幽幻種の魔笛……………そのなかでも、特  
に強力な沁力と魔笛同士が接触した場合に生じる現象だ。二つの力  
が磁石の同極のようにお互いを拒絶し、物理法則をもねじまげて強  
力な火花が放出される。

大聖堂の扉は氷結鏡界の力を受けるように設計されている。つまり  
この扉自身が強力な沁力結界として機能している。

そう、弾かれた理由はシェルティスの身体に宿る魔笛が強すぎるから…

そして、天結宮<sup>ソフィア</sup>が震えた。

「ゴツ、とい地鳴りと破碎音。振動はすぐ真正面、大聖堂の内部から。まるで大砲が天結宮<sup>ソフィア</sup>の外壁で着弾したような激震だった。

「まさか……」

『統率個体です。外壁を食い破つて大聖堂の内部に侵入した模様』

「…………ミイツ！」

喉を枯らして叫ぶも、固く閉ざされた扉を前にしては届かない。そう届かない。声も、自分の思いも何もかも。

「…………イリス！」

懇願するような気持ちでイリスに向かつて叫んだ。

「イリス、何か方法は？！なんでもいいんだ、なんとか扉を開ける方法は？！」

『あるとすれば、あなたの身体を蝕む魔笛が消え去るか、あるいは逆に、この扉を守る沁力と同等の、つまり氷結鏡界と同等の魔笛をもつてすれば……でも、そんなものあるはずが』

…氷結鏡界と同等の魔笛。

そういうえば、ユミイから聞いた覚えがある。氷結鏡界を支える皇姫と巫女には、結界を維持する祈りの歌があるのだと。はるか上空へと続くことから天結宮<sup>ソフィア</sup>とよばれる塔。その最上階で奏でられる旋律<sup>コード</sup>だからこそ、その歌は『第七天音律』と名付けられているのだと。

究極の沁力結界である氷結鏡界と、それを作動させる歌。

それと同等のものがあるとするならば、それはきっと穢歌の庭<sup>エデン</sup>そのもの

穢歌の庭<sup>エデン</sup>の……旋律<sup>コード</sup>……？

「……ある」

『シエルティス、いま何と?』

……あるじゃないか。穢歌の庭<sup>エデン</sup>の最奥まで落<sup>ハシ</sup>した時のこと。

あの日、

世界の終りの場所で  
確かに僕は、穢歌の庭<sup>エデン</sup>に流れる歌声を聴いていた。

「ある。……あるよ、イリス。」

『シエルティスどうしたことですか? まさか

「見つけたんだ、この扉を開ける方法。」

そう、答えはある時、

落<sup>ハシメテ</sup>下した穢歌の庭<sup>エデン</sup>に答えはあった。

魔笛<sup>メロディー</sup>

『第七真音律<sup>エデンンコーラ</sup>』

O e / D i x o l e = E , p i l e n o a m y i z i s  
e g . i c

(夢、理想の空隙へ沈み)

O e / D i x s h e l l E , c r o s s K y e l s o l i  
t x e s M i q i s I

(願、現世の孤独へ帰る)

その瞬間。

大聖堂の内部に侵入していたすべての幽幻種の動きが止まった。

c l a r d a c k t , m i h a s / x - m a d e l , e l m e  
i u a l e n l i h i t t i - o y u l i s

(歌漬え、絆は断たれ、祈りの一切空虚を望み)

S e r a , x e l e s l i n k y e l c i e l i s c l  
e y

(そしてまた、わたしも彼方の地へと旅立とう)

x e o s l o a r s i s f l a n - s - k e e n , N e l s

i s h i z t i n n y x e s r i r i s t e s z a l  
a h

(夜のかぜは 冷たく、鋭くそれは約束と福音の物語)

k a m i s w i r e / x - g o r n z a y n a z a l i s  
r e l

(罪色の雨は、記憶の籠を錆びつかせ)

N i d h i z l o a r n e c c r o s s - o z - y u l i  
s n o a m i s s i s c i e l

(もはや帰ることのない風は、遙かなる彼方へと消えていく)

ユミィは大聖堂に聞こえてきた旋律に聞き入っていた。

O e / k y p n e x e y a h e , r i a o l e / e n - d a  
c k t s t e r y

(眠れよ我が身 全て千々に潰えた夢のため)

O e / i d e n x e u i r s e , r i a e l m e i u a  
l e n

(沈めよ我が時 全て一切の祈りのために)

O e / k i l l s X e h a u l , r i a m i h a s / x - m a  
d e l z a y x u s

(凍れよ我が灯 全て永劫に断たれし絆のために)

……「うそでしょ

旋律でも詩でもない。それ以上にコノイマはその歌の『声』にのみを澄ませていた。決して幽幻種のものじゃない。

「…………うそ、だって…………」

すぐには信じられなかつた。なぜならほその声は、自分のよく知つてゐるあの少年のもので

“E mille - Ye - kypn pheno = E Mill  
kiss hiz qelno - belit elmei Ede  
n cia iden

( ああ 生まれ眠る子よ 見届けなさい、樂園の全てが沈んでも )

ris - ia sophia , X ele dia kyel r  
ri sis is Uls

( それでもなお、近いの丘へと私は歩く )

俺は今大聖堂の内部に転移してきて隠れている。そして俺達は旋律<sup>ロード</sup>に聞き入つていた

そして、重々しい音と共に、大聖堂の扉が開いていく。

氷結鏡界に限りなく近い結界を張り巡らせた扉。幽幻種では絶対に開けられないはずの聖なる扉が、自ら封印を解いていく。

今シホルティスに顔を知られるのはやめておきたい、原作ではシホ

ルティスは戦いが統率個体との戦闘が終わりコミィと会話したあと  
気を失うはず。俺達はそれまで隠れておくことにした。

Oe / s i a E d e n , O l e e l e , S e l a h p  
e n o s i a - s O r b i e C l e y  
(全ての夢見る世界のために)

開放された扉のその先に、たった一人の少年が立っていた。

やつくりとその少年がコミィの方へ振り向いた。

「「ん、コミィ。ずっと……またせて。」

やばい……ものすごい感動する場面だよ……涙出きたよ……ぐはは  
う…

ココの方をみてみるとやはり泣いていた。

やつぱり小説読んだ時と違つて実際にその場面にいると感動とか全  
然違うね。

「……あ……あつ……」

まぶたから何かがこぼれ、視界がぼやけていく。

涙が止まらない……ずっと、我慢していたのに。m値の中、張り詰めていた何かが、ふつんと途切れたのがわかる。まだ何も終わっていないのに……彼がそこにいるだけで、とても大事な何かを守れた気がした。

双剣の少年。自分を守る千年獅になると行ってくれた彼。

シェルティス・マグナ・イルが、立っていた。

な、ながかつた・・・そして、幽幻種侵入事件 終わりませんでした。

私はちゃんと19時から書き始めたんです。なのに途中でどうやらアリアとコリを千年獅と巫女にするか考えたりして書いてたら、1時30分をすぎていることに気づき、一旦切つて投稿しました。

だつて一日一回更新したいんですね。

それとおもつたんですが、オリキャラのイメージを描いてみようかなと思いました。その理由は、物語を考えてるとき（妄想しているとき）オリキャラのイメージがあると場面の想像とか動いてる映像が想像しやすいからです。

でも咲亜は絵の才能も文才もないで絵は書いてみて100点中30点以上とれたら載せてみようかなと思つています

これからもよろしくお願ひします。

次の話で幽幻種侵入事件は終わると思います・・・

## 6話 世界が原作と変わってきたる~（前書き）

えっと、咲唯です。

5話に漢字変換ミスとキャラの心の中での喋り方が少し可笑しいかな?と

おもつたので修正しました。なので内容は変わりませんので読み直さなくても大丈夫です。

これからもよろしくお願いします。

では本編6話はじめます。

## 6話 世界が原作と変わってきたる？

大聖堂の扉が開いた。

シェルティス・マグナ・イルが、立っていた。

そして、凍てついた時が動き出す。

幽幻種の魔笛が再び流れ、禍々しく輝く光の奔流が大聖堂を照らし出す。だが双剣の少年は、それより早く大聖堂を駆けたいた。

### 二条の剣閃

右の剣で放たれる魔笛と障壁を破碎し、左の剣で幽幻種の核晶を打ち碎く。魔笛による障壁を完全に無効化されたことに、残る幽幻種からは動搖のざわめき。その虚をついてさらに左右の一体、さらに背後の1体の核晶を破壊する。

次々と少年が幽玄種を打ち倒していく、幽幻種次々と消えていく。

残るは統率個体。

だが少年が振り返った時、いるはずの巨大な幽幻種は忽然と消えていた。

「……消えた？」

春蕾が当たりを不安そうに見つめる姿。音も無く消えた統率個体。どこに逃げた？離れてみていたユミィにもわからなかつた。そう、

今もなお誰にも気づかれてみている一人以外はだれもわからなかつた。

ばさつ。大聖堂に開いた壁穴の先、巨大な羽ばたき音が聞こえたのはその時だつた。

『大聖堂の外です。この場は諦めています!』

少年の胸元でイリスが激しく点滅。

氷結鏡界に集中した皇姫は完全な無防備。  
……サラ様が攫われる。  
誰より浮遊大陸オービエ・クレアを憂い、自らを犠牲に氷結鏡界を支えてきた人が……

私とアリアは今も隠れて見ている。

すると、統率個体がシェルティスやコミニ、春薔に気づかれて外壁のそとに飛び出した。もしかして、サラのところに向かうのかな?もし、向かつてるなら助けたほうがいいかな?とか考えていると

「もしあの統率個体が最上階に侵入したらすぐ倒せるように転移の準備だけしておいて」

アリアも私と同じことを考えていたようだつた。助けてあげたいけどシェルティスにはなぜここにいるかは言えないから、だから本当に危険な時、シェルティスたちがどうしようもなくなつた時以外はみていようと思っていた。

だから私はアリアだけに聞こえるような小さな声で答えた。

「うん、わかった」

私たちは会話していた時も場面は進んでいた。今はイリスが統率個体の場所を叫んでいた。そしてヨミイが叫んだ。

「 ショルティス！」

私はこのままだとどうなるか、そう悟った瞬間、私は目の前の少年にむけて叫んでいた。

一度は天結宮<sup>ソフィア</sup>を追放された少年。そんな彼にこんなこと願うこと自体、どれだけ自分勝手なことは分かっている。なんて都合の良い願いなのかも分かっている。

……それでも、頼らずに入られなかつた。

この場でそれができるただひとりの人間だから?「ううん、違う。……たとえこの場にレオンがいても爛がいても、わたしは……目の前の彼に頼りたかった。」

巫女は自分の全てを、ただ一人の千年獅<sup>パートナー</sup>に託すものだから。

その意味が、ようやくわかった。

「シェルティス……お願い！」

だから私は叫んだ。

ずっと探してた、自分の全てを託せる少年に向けて。

「サラ様を……つ、みんなの浮遊大陸を……守つて！」  
オーピヒ・クレア

その少年は自分に向かって振り返った。目止め、視線と視線が重なつて

……シェルティス、笑つてた？

一瞬の余韻を残し少年は壁の大穴から天結宮の外へと身を躍らせた。

高度一千メートルの空域、天結宮<sup>ソフィア</sup>の最上階へと飛行する幽幻種を追いかけて。

シェルティスが外に飛び出したときにどこからか「わあ」と聞こえたような気がしたけれど、ここには私とシェルティス、春薔しかいないはず。だからたぶん聞き間違えだと思う。

あ、危なかつた… さつきは思わず声出せやつたよ。だって、本の中なら「へえ～がんばるね」と軽く流せるんだけど、実際見ると驚きが多すぎて……

それは置いといて。今シェルティスが外から戻ってきた。シェルティスの身体を見ると腕からは血がドクドクと流れしておりとても痛そうだった。けれどシェルティスは自分の幼なじみのコミイを見て声を発した。

僕が統率個体を倒し、大聖堂に戻ると大聖堂の内部は決して平穏な状況とはかけ離れたものだつた。足元の絨毯は腐食して剥がれ、天井の照明器は濁った黒色にただれています。壁の燭台も魔笛の神職を受けて半ばで折れている。

でも、間に合わなかつたわけじゃない。

部屋の中心で、コミイは着物姿の巫女と共に立つていた。直接的な外傷はもちろん、魔笛を浴びた九通からも今は回復したようだつた。

そう、守れた。自分の一番大切な彼女を。

けれどなぜだらう。全て終わつたはずなのに、胸を締め付ける緊張がおさまらない。いやむしろ、こうして彼女を前にしている方がはるかに

「あ、あのや……」

シェルティスはしつしに声をしぶりだした。

「…………無事で…………よかつたよ、本当に」

違う、違うんだ。言いたかったのはそんな言葉じゃない。そう分かっていても、口にできたのはそんな平凡なものだけ。けれどその半面、そんな拙い言葉だけでも伝えられたことが嬉しくて。

「…………」

少女は下をむいたまま答えない。

「そう…………だよね。ゴミィは巫女だものね。きっと、こいつして言葉をかけられるだけでも……一般人の僕には出来すぎたことだよね。」

未曾有の災厄から天結宮ソフィアを守ることができた。ゴミィも無事だし、彼女が氷結鏡界オーピヒ・クレアを支えれば浮遊大陸は助かる。天結宮ソフィアから追放された自分にとつては出来すぎた成果だ。

……本当は、もう一度全部やり直したいって伝えたかったけど。

この場では伝えられない。自体が全て終息して、天結宮ソフィアの機能が落ち着いてからだ。外部の人間である自分が大聖堂に長いはできない。

「ゴミィ…………ごめん、僕が天結宮にいたらまずいんだよね。すぐ……帰るから」

大聖堂の扉へ、巫女一人に背を向ける。

「……行かないで」

それがユニアからのお言葉だと気づいたのは、ふるえる唇を必死に動かそうとする彼女の姿を見たからだった。

「ば、ばか……シェルティスのばかっ！ なんで……なんで……」

「するいよ……やつと来てくれたと思ったのに……何も、言わ……つないで……なんでも、どこか行っちゃおうとするの？！ わたし……ずっと待っていた……のに」

「……ユニア」

「おかえり……ようやく、来てくれたんだね」

両手を広げた少女が、微笑の眼差しでゆっくりと歩いてくる。静かな大聖堂で、一人は互いに手を伸ばし。その指先が確かに触れた

その刹那。

少年と少女は、全く同時に一年前の悲劇を思い出した。

チチ……チッ……

二人をつなぐ手と手の間に雷光さながらの青白い火花が迸つた。

エルベルト共鳴。

強すぎる沁力と魔笛が重なったとき、それは物理減少をも捺じ曲げて待機中に放電現象として現れ、接触した者たちを炎で裁く。

「チチ、……チツー……

重なる指と指を、雷光さながらの火花が容赦なく焼き焦がす。

「あ……つー」

悲鳴にもならない声を上げて、少女がその衝撃で吹き飛ばされた。

「ハハハ！」

「…………あ…………ははつ…………」

返事は、乾いて錆び付いた笑い声だった。

「…………一年前と…………これも、

」

俺とコリはしばらく一人のやり取りを見ていた。これで幽幻種侵入事件は終わった。そう思っていた時だった。

グオオオオツ

大穴が開いた壁からさつきの統率個体より大きい竜型の幽幻種が入ってきた。シェルティイスがユミイを守るように少女の前に立ち双剣を構え幽幻種に向かつて駆ける。

……原作と変わってきてる？これもイレギュラーのせい？それとも俺たちがこの世界に来たから？

そういうえば、幽幻種が氷結鏡界をを破つて侵入した数も原作よりも多かつた気がする。

「ユリ！緊急事態だ！であるよ！」

「私は巫女一人を守るから、アリアはシェルティイスと幽幻種をお願い！」

「わかつた」

俺とユリは巫女一人とシェルティイス、幽幻種がいるところに向かつて走り出した。

シェルティイスは双剣で幽幻種に切りかかるも双剣は弾かれ、幽幻種に殴り飛ばされたつていうのかな？とにかく吹き飛ばされて、巫女、ユミイと春薫がいる方へ飛んでいった。俺は走っているスピードを上げ、シェルティイスと巫女一人の間で止まつた。

「シェルティイス！」

後ろでユミイが叫ぶ、と同時にシェルティイスが飛んでくる。俺はシェルティイスを受け止めようとした

そう、俺は忘れていた。俺達はサラより強い沁力を持つていてそれを、シェルティイスは強い魔笛を持っていることを…

俺がシェルティイスを受け止めようとした瞬間

ヂヂヂ……ヂツ……バリツ……バチツ……

エルベルト共鳴。

さっきのシェルティイスとユミイのエルベルト共鳴の比でないほど強力な青白い火花が出る。

「……っ！」

あまりの激痛にすこし声が出てしまった。シェルティイスは気絶したようだ。それほどエルベルト共鳴が強かつたということだ。

「あなたたちは一体…それにあのエルベルト共鳴…」

後ろからユミイが聞いてくる。シェルティイスが気絶して話を聞いていない今なら話ができる。ユリもそう思つたみたいだつた。

「私たちはあなたたちの味方です。私は六人目の巫女、ユリ・ミストルティインです。そしてそつちはアリア・ミルメスト。私の千年獅です」

「アリア・ミルメストです。六人目の巫女の千年獅です」

なぜか丁寧口調になってしまった。

「それとなぜさつきより強力なエルベルト共鳴が起きたかというと、話はあとでします。先にあの巨大な幽幻種を倒さないと

「

話している途中に巨大な幽幻種まず巨大な雄叫びをあげ、次に魔笛をとなえはじめた。

シェルティスが勝てなかつた幽幻種だ。魔笛もとてつもなく強いものだろう。だとしたらその魔笛が発動する前に倒すのが賢明だ。俺は直ぐ様幽幻種の方へ向き変える。

「魔笛つ！？」

後ろで何か言つてるけれど、俺はシェルティスの双剣よりすこし大きい剣を具現化させる。現れた剣は、どことなく聖なる気が漂つている。そしてその剣はシェルティスの剣と違い、水晶のように透き通つてはいなかつた。

アリアは剣を片手で構え走り出す、しかし走り出してすぐにつの姿が消えた。次の瞬間には幽幻種の目の前にいた。アリアは剣を両手で握りいともかんたんに首を切り落とし、幽幻種の核晶を貫いた。

核晶が砕けた幽幻種は霧状となつて消滅した。アリアは剣を消し、ユリたちの方へ歩き出す。

私は今見たことが信じられなかつた。

最初は、六人目の巫女を名乗る人が現れて、その千年獅も現れた。そしてなによりその千年獅が突き飛ばされたシェルティスをキャッチしようとしたらエルベルト共鳴が起きた事。

エルベルト共鳴は強い沁力と魔笛が重なり合つと起きる自然現象。そのエルベルト共鳴は私の時よりも強力で、千年獅の少女アリアちゃんは激痛のあまりかすかに声を上げていた、シェルティスは激痛で気を失つていた。

千年獅の少女は剣を作り出し、構えて幽幻種に向かつて走り出した。そして消えた。次見えたときは幽幻種の目の前で、アリアちゃんによつてすぐに幽幻種は消滅した。

アリアちゃんは歩いてこつちに戻つてきた。

アリアちゃんは私より強い沁力を持つていて、シェルティスよりも強い

とても幼い少女一人が私たちを助けてくれた。

「わたし…あなたたちのこと……しら…ない…」

春薔は私たちを助けてくれた一人のことを知らなかつた。

私も一人の事は知らない。もし本当に巫女と千年獅なら、私たちは知っているはず、それにこの年で巫女や千年獅になれるものなの？

そういうた考えが頭の中を駆け巡る。

「えつと…私たちは、さつきサラに…サラ様に巫女と千年獅にしてもらつたんです。」

えつ、今コリちゃんは一回、サラ様のこと呼び捨てにしなかつた？

それにさつき巫女と千年獅になつたつて…どういふことなんだろう…

「えつと…コリちゃん、巫女と千年獅にしてもらつたつてどういふことなの？」

「私たちは巫女見習いや鍊護士などは飛ばして、巫女と千年獅にしでもらつたんです。してもらつたと言つ…サラに巫女と千年獅になりませんか？つて言われてですけど」

…そんなことあるの？それにサラ様のことをもう普通に呼び捨てで呼んでる。もしかしてサラ様の知り合いの人なのかな？

「サラ様の知り合いの人とかですか？」

私は思い切つて聞いてみました。すると答えてくれたのはアリアちゃんでもコリちゃんでも、ましてや春薔でもありませんでした。そう答えてくれたのは

『はい、アリアとコリは私の知り合いです。その一人は私が巫女と千年獅に誘いました。』

「えつ、ね、サラ様、じつじつ……？」

私は驚おどろいて何を言つてゐるのかわからなかつた。

「あ、サラ、これから巫女と千年獅全員集めて、俺達のことが、挨拶したいんだけど。よかつたらみんなを呼んでくれないかな？ それとユミィ、これは念話だから「どうしてここに……」つてこうのはおかしこと思つよ」

『ねつですよ、ユミィこれは念話です。なのでその言い方は変ですよ。それさまあいいでしょ。巫女と千年獅を全員呼べばいいんですね？』

「うそ、任せせるね」

私はやうやく驚いた。だつていきなり現れた千年獅アリアちゃんは自分のことを俺と呼び……そのことじやなへて、アリアちゃんとサラ様が普通にタメ口で会話をしていくこと。

それとアリアちゃんは可愛いんだから俺とか言つて欲しくないかな。

「アリアちゃん、せつかく可愛い女の子なんだから、俺とか言わないで私つて言つたまうがいいと思つよ」

私がそつとアリアちゃんはなぜか顔を赤くして叫んだ

「え……俺はお、と、い、だ……」

え、今アリアちゃんが自分のことを男の子つて言つたような……

でも、こんなに可愛い男の子がいるはずが・・・

「……………」

あれ、今私にもいつてないよね、心読まれた？！

「俺は男なの。」

「それはいいとして、巫女と千年獅を全員集めるんだよね？…なら違うところがいいんじゃないかな？」

そうだった。これからちゃんとした発表があるはずなのだ。でもシエルティスはまだ眠ってる。どうしよう…

するとアリアがまた私の心を読んだのか、

「俺達はシエルティスにまだ知られるわけにはいかない。だからシエルティスは救護階へ。なぜ知られたらいけないのかは後で話すよ。それにユミヤはシエルティスとはこれから何回も会つことなると思うよ」

「うん、わかった。それと、私がシエルティストこれから何回も余うことになるっていうのはどうしたことなの？」

「それもあとで話すよ」

そしてシエルティスは救護階へ、私たちは269階にある会議室へ向かった

俺達は269階F会議室で30分位待ちやつと全員揃つた。みんな疲れていて何人かはところどころ怪我をしている。そしてみんな俺とユリの方を見ている。確かに巫女と千年獅が全員集められて、まだ巫女と千年獅になつた俺たちのことを知らない人から見れば、部外者だらう。

そして千年獅の一人が話しかけてきた。そう、あの時あつた娘だ。

「あ、お前はー。さつきは助かつたぜー。けどなんでここにいるんだ？」

「爛、この一人の少女のこと知つてゐるのか？」

レオンが爛に聞く。そつアリアにとつて禁句を交えて

「俺は男だーーー！」

「「「「「えー？」」」」

え……みんな驚かないでよ……確かにすこし女の子っぽいけど……俺  
男……だよ……？

ビクビク……悲しくて涙出てきた……

「ぐす……ぐす……へ、……！」

俺はサラ様に呼び出され、269階F会議室に来ていた。そこには巫女と千年獅が全員集まつていて、さらに知らない一人の少女がいた。

そして俺はただ、爛にこの一人の少女知つてゐるか？ と聞いただけだ。そしてその少女の一人が俺は男だーーーーーと言い、思わずえつ？！ と言つてしまつた。

すると少年？は泣き出しちしました。

これは俺のせいなのだろうか。

そう考へてゐると知らない一人の内の少女のほうが少年？に抱きついて、「アリアは男の子だよ、私がそう知つてゐるから、泣き止んで」と頭を撫でながら慰めていた。

すると少年…アリアと呼ばれていたのでその少年の名前はアリアなのであるう。アリアはすぐに泣き止みしばらく少女と抱きついていた。そしてこの状況がいつまで続くのかと思い出した時

『みんなそろつたようですね。それにアリアは災難でしたね。そしてなぜ巫女と千年獅であるあなたたちを全員呼んだかというと、あなたたちにこの子達を紹介したかったからです。ではアリア、ユリお願いしますね』

サラ様がそう言つと、一人は抱き合つのを止めユリと呼ばれた少女が話しお出した。

「私はユリ・ミストルティンといいます。今日、六人目の巫女になりました。これからよろしくお願ひします」

な、今なんて言つた…

確か六人目の巫女と、……え？六人目？？

「俺はアリア、アリア・ミルメスト。今日からユリの千年獅になります。これからよろしくお願ひします」

今度は千年獅！？

「なぜこうなつたかと言つと、それは……サラ、説明任せた！」

ぶはッ！…！

アリア、今サラ様を呼び捨てにして説明を押し付けやがった…

『では、私が説明しましよう。なぜこうなつたのかといいますとそれは、私がこの子たちの力を知り、味方になつて欲しかつたので巫女と千年獅になつてくれませんかと頼んだからです』

「二人はどのくらいの力があるんだ？」

「こいつらは、めっちゃ強いぜ！なんせあの時一人とも一撃で幽幻種百体位ぶつ倒してたし」

「「「「「なつ……」「」「」「

「それに、普通沁力の術式って結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の5つだろ？でもこの一人は魔法系つつう新しい系統を創つて使つてた。さらにものすごい沁力だつたぜ」

「魔法系？なんだそれは。それとものすごい沁力つてビのくらーの沁力なんだ？」

「ええと、魔法系というのは私とアリアが創つたもので、簡単に言うと元からある5つの系統にはないものを詰め込んだのが魔法系です。あと沁力ですが、私はサラの2000倍くらいの量の沁力を持つています。」

「あ、沁力は俺も一応あるよ。量はサラの1000倍くらいだけど

「「「「「「ええええ！？」」「」「」「」「」「

その後しばらく会話が続きアリアとヨリは巫女と千年獅の仲間入りとなつた。

しかし、アリアとヨリはサラに頼まれてなつたとはい、護士や巫女見習いを飛ばしており、正式に発表するのはやめておこうとなり、二人は幻の六人目となつた。

一人の正体を知つてゐるのは巫女と千年獅にサラだけである。

## 6話 世界が原作と変わってきたる？（後書き）

まず、オリジナル設定かどうかはわかりませんが

沁力は女人のみが持っている ということにしました。

アリアは例外です！！

それとキャラ崩壊してるかもしれません。

最後の方セリフばっかりになっちゃった…

これで幽幻種侵入事件を終わります

## 7話？アンケートとお知らせ（前書き）

「んにちは咲亜です…

今回7話は 千年獅が護士候補生？！ をしようと思つていたのですが

何とひよひじキリがいいといひまで行き、晩ご飯食べていました。

晩ご飯食べてパソコン見ると…

なぜかパソコンがすべてのページを閉じていたのです…

そうです、自分的には結構な量の7話が…消えてしまつたのです。

咲亜は消えた7話と同じ内容は書けないです。

それと、今日は書きたくななりました・・・

なので明日、消えた7話以上の話を作らうと思つています。

自分勝手なのはわかつていますが、今回は勘弁してください・・・

## 7話？ アンケートとお知らせ

「お知らせ

6話の誤字を修正、コリの心の中でのサラの呼び方修正を行いました。

ほかにも間違っているとこがあれば指摘お願いします。

アリアとコリのイメージ決めました！

アリアは…

咲姫の大好きなメロンパンをよく食べている少女、

シャナにしました。

見た目はシャナで髪は黒色、瞳は紅い、…あれ、これシャナそのま  
まなのでは…

…あ、アリアはシャナとほぼ同じ感じとこ「！」とい…

そしてコリは

同じくシャナに出てくれるカーテーにしました。

髪はくカーテーの青っぽい色とは違ひ金髪で、長さは腰の少し上ぐらい、瞳は蒼色。

すこし想像しにくいですが自分的には気に入っています。

だれかイメージ画書いてくれたらうれしいのですが…

昨日2時から頑張つて書いたんです。

そしたらなんとも言えない感じになります。・・・

### 「アンケート」

今まで視点変更するときは誰の視点か書いていませんでした。なので一つ目のアンケートは

1、視点変更時、誰の視点か書いたほうがいい。 YES、NO

もつとつせアリアとコリについてです。

自分は次の話からイチャイチャさせようと思つていたんですが、これから少しずつアリアとコリが両思いになつていき少しずつイチャ

イチャをせめてこくのものにかなと思つたので、

2、アリアとコリはすでにイチャイチャする関係、もしくはこれからイチャイチャする関係のどちらがいいかです。この質問はできれば詳細まで書いてくれると嬉しいです。参考にしたいです。

7話？ アンケートとお知らせ（後書き）

本編でなくてすこません^ ^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7273y/>

氷結鏡界のエデン 目指すはハッピーエンド

2011年11月24日21時49分発行